

長岡中央総合病院 倫理委員会 オプトアウト書式

① 研究課題名	膵頭十二指腸切除術後の晩期胆管炎の検討
② 対象者及び対象期間、過去の研究課題名と研究責任者	北見智恵
対象は 2015 年 1 月から 2023 年 10 月まで当科で施行した膵頭十二指腸切除症例中、退院後に中等症以上の胆管炎と診断され、入院した 19 例	
③概要	<p>【はじめに】胆管炎は周術期のみならず退院後社会復帰した後も発症する合併症であり、頻回の発熱や敗血症の原因になることがあり、化学療法施行や患者の QOL に大きくかかわる病態である。【目的】膵頭十二指腸切除(PD)術後の退院後に発症した胆管炎症例について検討する。</p> <p>【対象と方法】胆管炎の診断は Tokyo Guidelines 2018 に準じた。対象は 2015 年 1 月から 2023 年 10 月まで当科で施行した PD 230 例(肝切除併症例は除く)のうち、退院後に中等症以上の胆管炎と診断され、入院した 19 例(8.3%)。【結果】6 例(31%)が複数回入院を要し、最大で 7 回の入院歴があった。原疾患は胆管癌 9 例(47%)、膵癌 8 例(42%)、乳頭部癌 1 例(5%)、PNEN1 例(5%)で、男性 17 例(90%)、女性 2 例(10%)であった。年齢の中央値 70 歳(53-82)、手術から術後胆管炎発症までの期間の中央値は 507 日(29-1993)、手術時 BMI 21.3 kg/m²(18.1-27.7)、手術時間 361 分(259-604)、出血量 655 g(165-3187)、吻合部胆管数の中央値 1(1-6)、胆管炎を除く術後合併症は膵液漏 10 例、偽膜性腸炎 1 例であった。術前ドレナージは 14 例(73%)に施行され、術前胆管炎を 9 例(47%)に認め、うち 6 例(66%)は複数回ステント交換を要していた。術中胆汁培養陽性は 16 例(84%)で、主な菌種は <i>Enterococcus faecalis</i> 6 例(31%)、<i>Klebsiella oxytosa</i> 4 例(21%)であった。胆管炎発症時の血液培養陽性は 18 例(94%)で、分離菌は <i>E.coli</i> (うち 1 例 ESBL)が最も多く 13 例(72%)で検出された。術中胆汁培養と菌種が一致したのは 2 例だった。肝嚢胞の合併は 4 例(21%)、術後 CT で胆道気腫は 12 例(63%)に認めた。開始抗菌剤は TAZ/PIPC 8 例、カルバペネム 4 例、LVFX 2 例、SBT/CPZ 1 例、CTR1 1 例、投与期間の中央値は 8 日(4-27)であった。吻合部狭窄 6 例(31%)(うち 2 例は再発による)、4 例で肝内結石を認め、内視鏡的治療で改善した。肝膿瘍併発 8 例(42%)、うち 6 例でドレナージを施行した。3 例で化膿性脊椎炎を発症し長期入院を要した。【考察】術後晩期胆管炎入院時の血液検査陽性率は 94.7%で、<i>E.coli</i> が最も多く、治療開始抗菌薬は TAZ/PIPC、カルバペネムで妥当だと考えられた。吻合部狭窄が胆管炎の原因になることがあり、積極的に内視鏡を行ったほうがよい。肝膿瘍、化膿性脊椎炎に発展する症例を認め、早期診断、ドレナージや適切な抗菌薬治療が重要である。</p>
④申請番号	
⑤研究の目的・意義	膵頭十二指腸切除術後の退院後に発症した胆管炎症例について検討する。
⑥研究期間	2015 年から 2023 年 12 月
⑦情報の利用目的及び利用方法(他の機関へ提供される場合はその方法を含む。)	日本消化器外科学会ホームページ
⑧利用または提供する情報	血液 画像 臨床記録

の項目	
⑨利用の範囲	長岡中央総合病院外科部長 北見智恵
⑩試料・情報の管理について責任を有する者・連絡先	長岡中央総合病院外科部長 北見智恵
⑪お問い合わせ先（照会先及び研究への利用を拒否する場合の連絡先）	長岡中央総合病院 外科 北見智恵 〒940-8653 新潟県長岡市川崎町 2041 番地 TEL 0258-35-3700 FAX 0258-33-9596